

英語専攻大学1年生を対象とした 英語多読授業の実践報告

黒 沢 眞里子

1. はじめに

本大学において英語を専攻する1年生を対象とした多読の授業を連続して3年行ってきたので多読授業の具体的方法も紹介しながら、各年度の問題点と改善点を含め報告を行いたい。結果として、年を追うごとに学生の多読授業に対する態度もより積極的となり、入学時と半年後に行われた TOEIC®テストの平均点の伸びを見ても、1年目 39 点、2年目 99 点、3年目 138 点アップと著しい上昇が認められた。多読授業に関する研究では、少人数のクラスや、選択科目として行ったケースがほとんどであるが、本報告は 30 数名から 50 名近い比較的多人数のクラスでの英語専攻の必修科目において、多読を実践した事例である。

2. 多読授業導入の背景と目的

これまで、大学において英語専攻、非専攻の学生の英語読解の授業を担当し、リーディング授業の難しさを実感してきた。1クラス 40 名前後の学生を対象に、共通した 1, 2 冊のテキストを選ばなくてはならないこと、受講生の多様な関心を考慮して毎回異なるマテリアルを使用したところで、授業は教師がリードし、質問を受けた限られた学生が参加する、一方的・限定的な形式になりやすいことが問題だった。個々人の身体活動量を促すフィットネス・プログラムのように、授業中「待ち時間」を無くしてフルに「運動」、すなわち「読書」をして、読解スキルを鍛えるような授業に転換できないかと考えた。

2007年度に英語英米文学科の1年生の必修科目としてのリーディングを担当することになり、この機会にリーディング授業の見直しを行った。筆者の担当クラスは、入学時に実施する TOEIC®テストを用いた習熟度別クラス分けて、上位層に位置し、しかも標準偏差が大きく、上位は800点近くから下位は500点台前後と、300点以上の開きがある50名近いクラスである。このような英語体力に大きな差のあるクラスこそ、個々の学生が独自に取り組む「フィットネス」方式とも言える授業形式の方が効果的に読解スキルを向上させられると考えた。

そこで注目したのが多読の授業である。多読の授業では、教師はクラス全員に向かって「教える」のではなく、個々の学生たちに適切な読書指導をしながら、学生たち自身に「汗をかかせる」ことができる。学生たちは自分の好きな本を選んで、独自の読書プログラムを構築・実践していくからである。

多読授業導入の目的は次の通りである。

1. 英語力にばらつきのある比較的大人数のクラスで効果的なリーディングスキルを身につけさせ、さらには全般的な英語力アップを図ること
2. 多量の英文を読むことにより、英文を読むことへの抵抗感をなくし、2年次以降のより高度な英語専門書への移行をスムーズにすること
3. 何よりも、読書の楽しみを体験して、それを卒業後も継続できるような読書力・習慣を身につけることである。

体を鍛える「フィットネス」という言葉はこの場合、適切な比喩であるように思える。というのも、ここで試みようとしていることは、たとえばフィットネス・プログラムをスポーツ科学（体育）の授業で勉強すると、授業外でも、卒業後でも健康維持の「運動」を継続してできるように、リーディングの授業以外でも自律的に英文を読むようになる動機付けと、実践方法を学生に身につけさせることを最終目標としているからだ。

3. 1年目の試み (2007年度)

3.1 速読と組合せ,ただひたすら読み続ける

2007年度,最初の多読は1年生48名でスタートした。テキストには,多読用教材としてもっとも一般的な,オックスフォードとペンギン版の *graded readers* (これ以降 GR と省略) と,導入時に読ませる *Frog and Toad* や *Curious George* シリーズなどの絵本,より進んだ時点で読ませるために, *Roald Dahl* シリーズ,また多読に飽き始めたときに読ませる英語の漫画,例えば英訳された日本のマンガである *Nodame Cantabile*, *Death Note*, *Dr. Slump* の各シリーズも揃えた。

初回の授業で多読の方法についてパワーポイントを使い説明を行った。酒井・神田(2005)などを参考に,多読の仕組み,目的,効果等につて丁寧に説明し,多読用テキストである GR を紹介した。英語を身につけるには時間がかかること,英語を長時間継続して学習するためには,その方法自体が,学ぶ人にとって楽しく有意義であることが必要であることを伝えた。従来の「苦勞して英語を学ぶ」(“No pains, no gains”)から,考え方の大変換を図る必要があること,次の3つのルールを守ることを強調した。1. 楽しいことを中心にやる, 2. とりあえず必要でないことはあとまわしにする, 3. 100%にこだわらない。これを多読による英語学習にあてはめると, 1. 自分が面白いと思える本を自分で選んで読む, 2. 英語の本を読むために必要でないことは後まわしにし, 70%程度の理解でよしとする(吉川, 2003: 10-11), となる。そして最後に, 日本の英語多読研究会 SSS (*Start with Simple Stories*)の多読法で勧めている多読3原則, 1. 辞書は引かない, 和訳しない, 2. 辞書を引かなくても十分わかる本を読み, わからないところは飛ばす, 3. つまらなくなった本は読むのをやめて後まわしにする, を紹介し従来のリーディングから多読のマインドセットへと意識を変換させた¹。3年目の学生のコメントに, 「高校時代に多読をやったことがありましたが何のためにやるのか, 役に立

¹ SSSのサイトは以下の通り。[<http://www.seg.co.jp/sss/>] (2009.10.15)

つのかと疑問に思っていましたが、黒沢先生のパワーポイントを見て、自分の考え方がわかりました」という言及があり、多読を始める前にその仕組みと意義、ルールについて説明し、参加者が多読学習法に対して熟知しておくことは、多読の効果を上げるために重要であることが再認識された。

初めての試みでもあり、しかも多くの多読指導書が勧める、最初は少人数の、選択科目で試してみるという原則に反した、大人数の必修科目、しかも英語専攻の学生を相手にするとあって、これを成功させるためには、クラスの良い雰囲気づくりと、教師と学生との親密なコミュニケーションが鍵となると考えた。大人数クラスに対処する為に、6人のグループを作り、チーフを決め、お互いの連絡先を交換し、グループ単位で読書させた。また、学生一人一人を知るために、クラス担任でもあったので、グループごとに昼休みに研究室に招き、昼食を共にしながら親睦を図った。

実際の授業構成としては、授業最初の15分間を *Timed Readings*(Glencoe/McGraw-Hill)をテキストに使い速読の訓練に当て、その後多読に移った。速読の訓練では、個々の学生の英語力に合った異なるレベルのテキストを同時使用し、毎回400語の短い英文を読んで読めた時間とその後の問題10問の正解率を記録させた。タイトルや、パラグラフのトピック・センテンス、固有名詞や数字等に注意して読むよう指示し、読む速度を上げるだけでなく、英語の文章の構造を学んで、瞬時に内容を把握するコツを学ばせ、速度を上げていくように指導した。

その後の多読授業の進め方は、多読の指導書が勧めるように最初は文字より絵の多い絵本から始め、多読用GRのスターター・レベルへと移り、学生の様子を見ながら徐々にレベルを上げていった。学生たちには、SSSが発行する読書記録ノートを購入させ、授業で読んだ本のタイトル、レベル、語数、評価、感想・メモ欄に毎回記入させた。多読の参考書によると(とくにSSS多読法)、課題を多く与えると読むことが負担になるので、最低限の記録とし、多量の英文を読むことに専念するようにとあったので、1年目はこれに従い、ただひたすら読み続けさせた。読書ノートは、半期ごとに4回くらい

のペースで集め、総語数を記録し、各自の多読の取組みをチェックした。ときどき授業の最後に、時間内に読んだ本の内容と多読についての感想や疑問などを書いてもらい、これにコメントを返す形で、きめ細かな指導が難しい大人数クラスの欠点を補った。

3.2 1年目の評価と問題点

3.2.1 多読総語数の伸び

多読で達成した総語数を見てみると、12月21日までに10万語以上を読んだ者は、9名（約2割）、そのうち133万語を達成したものが1名、82万語が1名、54万語が1名、20万語台が2名であった。100万語とは具体的には、大人向けペーパーバックの6から10冊分に相当する。100万語を達成した学生は、多読経験のある帰国子女の男子学生で夏休みにハリーポッター・シリーズを全部読破していきいきと語数を増やした。その他高レベルの語数を獲得した学生は、帰国子女ではない一般学生で、多読にのめり込み授業で読む多読用教材以外にも、自ら購入するなどして読み進めた学生たちである。*Charlie and the Chocolate Factory* など Roald Dahl のシリーズや、Louis Sachar の *Holes* に夢中になった者、Ian McEwan の *Atonement* の厚いペーパーバックをバックの中に持ち歩く学生も現れた。多読は初めての試みでもあり、工夫もあまりなくただ読み進めさせただけであったが、多読の参考文献でも示唆されているように、多読を行うだけで一部の学生には大きな効果（多量の英文を自発的に読むようになるという点で）が期待できることを実感した（酒井，2005:7-10）。

3.2.2 TOEIC®テスト結果

クラス全体の効果はどうだろうか。その1つの指標として春と秋に行われるTOEIC®テストの結果を見てみると、1学年全体で平均56点アップと6ヶ月の成果としては他大学と比較しても、かなり高い成果を上げることができた。これは、学科全体で取り組んできた英語力の底上げの努力が実ったもの

と理解できる。多読実践クラスは、しかしながら、39点のアップに留まった。底上げを図ることには成功したが、上位層の平均点を上げることは簡単ではない。しかし、個々の学生の伸びを見てみると、100点以上の伸びを示した9名のうち、6名は多読総語数20万語以上達成した多読上位層であり、教師とコミュニケーションをよくとり多読に熱心に取り組んだ学生はTOEIC®の点数を確実に伸ばしていた。

3.2.3 図書館との連携

多読に強くコミットさせるうえでネックであったものは、多読の教材をLL教室自習室で読む以外、自宅に持ち帰れないことだった。そこで、図書館でも多読用の教材を置いてもらうことにした。その際に、多読用教材として一つの棚(4階)にまとめて配架してもらった。後期から学生はここを利用して多読用の洋書を家に持ち帰って読むことができるようになった。図書館に関しては思いがけない展開があった。図書館利用サービスのスタッフが、多読教材に注目して、季節毎にテーマが変わる特別企画コーナーで展示・紹介してくれたことだ。多読の展示では、カラフルな本に加え、読書感想文を書く小さなカードも用意され、感想文を書いた人には、プレゼントも用意されている。毎回、ユニークな景品を提供してくれる先生もおり、私も海外で小さなお土産を見つけてきては寄付している。図書館のスタッフの話によると、英語のきれいな表紙に思わず足を止めて手に取って見る学生のなかには、英語にはあまり縁がなさそうな学生が多いそうだ。表紙が楽しいことも英語読書に対する壁を破ることに大いに役立っているようだ。

3.2.4 問題点 — 私語

問題点としては、1年を通じて私語の多いきわめて騒々しいクラスとなり、教師は静かな読書環境を維持するための「監視役」にならざるを得なかったことが挙げられる。なるべく楽しい雰囲気をつくるために、友人同士で勝手にグループを作らせたことに起因する。これを教訓に2年目は改善を試みた

が、もっとも目覚ましい展開があったのは3年目だった。それについては後に述べる。

4. 2年目の試み（2008年度） — 私語の防止と語彙サイズ測定テスト導入

4.1 私語の防止

2年目も（42名）、基本的に1年目と同じ方法で進めた。1年目の問題点である私語を防止するために、今回は席順を予め定めて座らせ緩い関係のグループをつくった。1年目と同じ最初15分は *Timed Readings* を使った速読の訓練、その後の時間はすべて多読に当てた。単調な授業にならないように、前期は TOEIC®で高得点をあげた先輩の話（日本語）を、後期はアメリカの提携校に中期留学した学生の話（英語）を聞く機会を2回設けた。英語の勉強法の話は、予定時間をかなりオーバーしてしまい、学生がどのような反応をするか心配であったが、ネガティブな反応はまったくなく、むしろもっと話を聞きたかったという意見が多く出された。後期の留学体験の話も英語力を向上させる短期目標としての留学への具体的な関心を喚起させるよい機会となった。このような *role modeling* の手法に代表されるピア・サポートが有効であることが再認識され、3年目にはこの部分の強化を図り、大きな成果を得ることができた。

4.2 語彙サイズ測定テストの導入

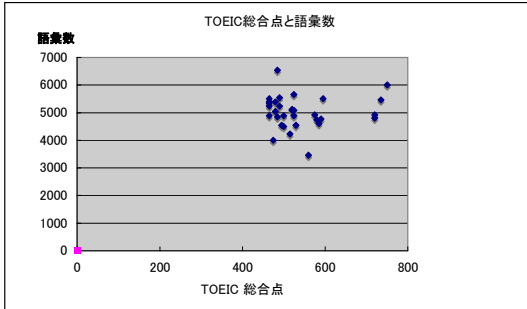
多読も2年目となったが、英語教育学と言語テスト理論の専門家である片桐一彦先生（本学准教授）の多読効果調査の一環として効果測定のための、語彙サイズ・テストを4月、7月、12月と実施した。効果測定とは別に、この語彙サイズ・テスト結果を利用させてもらい、TOEIC®と語彙サイズの相関関係のグラフをつくり、自分がどの位置にあるか学生に自覚させることにした（図1参照）。この相関グラフを見ると、語彙力がトップでも、TOEIC®は必ずしも高くないし、その逆もあることが分かる。片桐先生に御指導していただき、前者を「鉄道少年タイプ」、後者を「あたっていただけろコミュニ

ケーションタイプ」と命名した。前者は、語彙力はあるが実際の運用能力に欠けるタイプ、後者は語彙力はないが持ち前の度胸で英語によるコミュニケーションが成立してしまうタイプというわけだ。自分がどこに位置するかによって、英語の勉強法も異なってくる。鉄道少年タイプは語彙力をさらに伸ばしても、必ずしも TOEIC[®]の点数があがるとは限らない。このタイプは、自然な英語に多く触れ、豊富な語彙を実際に運用する力に変えなくてはならない。つまり、多読がもっとも効果的な学習方法になる。「あたってだけのコミュニケーション」タイプは、語彙力を伸ばすと共に、文法などもきちんと勉強する必要がある。学生は現在の自分の英語体力と問題点を把握した上で、秋に実施される第 2 回の TOEIC[®]テストを短期目標と定め、目標点数を設定させた。そして、それを達成する為に何をやる必要があるか具体的な戦略を立てさせた。その際に、「リーディング力を伸ばす」などの表現ではなく「通学時間の 40 分を使って、英文を読む／語彙を 20 覚える」など具体的に書くように指導し、目標をいかに達成するか、手帳活用なども含めた実践的自己管理の方法も指導した。一番のポイントは「今日実行しなければ永遠に実行しない」という認識を徹底させ、計画しても挫折してしまうメカニズムの問題点を自覚させて計画を着実に行動に移す仕組みを工夫させたことである。

図 1

TOEIC スコアと語彙サイズ相関グラフ

学籍番号 氏名



現状分析

1. 自分がどの位置にいるか赤で示してください。

語彙サイズ (語)
 TOEIC 総合 (点)
 リーディング (点)
 リスニング (点)

2. 自分の強みは何か?

3. 自分の弱みは何か?

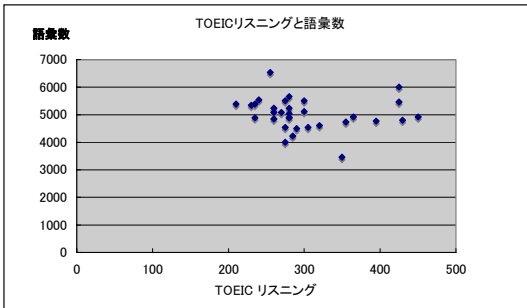
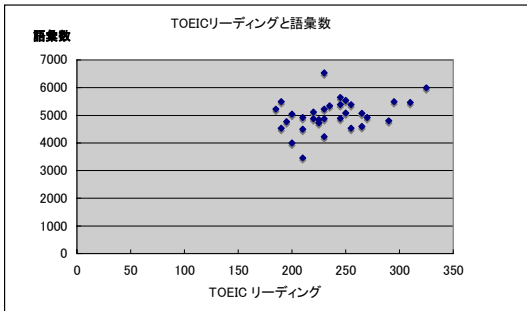
4. 問題は何か?

英語力アップの為の戦略

5. 目標を設定してください。

語彙サイズ (語)
 + 語
 TOEIC 総合 (点)
 + 点

6. 目標を達成する為には何が必要ですか? 具体的に戦略を立ててください。



4.3 2年目の評価と問題点

4.3.1 多読総語数の伸び

多読の成果としては、12月末までに10万語以上読んだ者が9名（約2割）、内20万語以上は2名だった。トップは23万語で、前年度の50万語台から100万語に達するものはいなかった。1年目の教訓として2年目はクラスの管理強化を図ったため、静かな読書環境は守られたものの、クラス全体の多読への強いコミットメントは生まれなかった。クラスの活動としては、先輩の話を2回もうけただけだったので、その分授業中の読書時間は確保でき、授業内多読の語数は達成できたものの、100万語を目標とするための授業外多読活動への動機づけが一部の学生に限られ、クラス全体に広がらなかった。

4.3.2 TOEIC®テスト結果

このような杞憂とは裏腹に、ふたを開けてみると、TOEIC®の伸びには大きな成果が現れた。春・秋の2回の試験で、英語英米文学科全体で前年を上回る86点の伸びが記録され、最上位クラスである当該クラスの平均点が99点アップという驚異的な伸びを示したのである。これは当然のことながら、リーディングも含めた1年生の全英語スキルクラスの努力と協力体制の成果といえる。リーディングに限って言えば、1年生はもう1つペアのリーディング1,2も必修科目として履修しており、その担当の英語学の専門家平田一郎先生（本学教授）は、授業を三分割し、きわめて斬新なアイデアを取り入れたリーディングの授業を実践されていた。ペアのリーディング授業がお互いに、大人数クラスの欠点を補い、個々の学生に「汗をかかせる」工夫を実践しており、学生にとってよい学習環境が整っていたことは間違いないだろう。

多読の成果という点から見れば、総語数がトップの23万語を読んだ学生は、TOEIC®が265点アップして、500点台からいっきに800点近くまで伸びクラス最大の伸びを記録した。今年度初めて導入した英語力アップのための戦略シートでは、学生が設定したTOEIC®目標値が的中した者が30人中（目標未

設定者を除く) 3名, 5点以内の誤差が2名, 10点以内が3名と8名(27%)が誤差一割以下で設定した目標値を達成するという興味深い結果がでた。

4.3.3 問題 — 授業外への多読の限定的広がり

2年目の問題点は、静かな読書環境は守られ、多読に楽しみを見だし積極的に関わる学生が現れたものの、クラス全体の多読への大きな盛り上がりは見られなかったことだ。それは、学年末までに達成した総語数が20万台止まりであったことに現れているだろう。20万台の総語数を達成した学生は、授業外でも多読を実践しているが、全体的に図書館利用もそれほど活発ではなかった。1年目は騒々しいクラスであり、多読への取組み方にも差があったが、不満を聞くことも含め学生と教師とのコミュニケーションが良くとれ、前述したように特定の学生には多大な効果があった。2年目はTOEIC®の結果には大きな伸びが見られ、静かな環境で多量の英文に接することができ、多読授業導入目標の3つのうち、最初の2つ、全般的な英語力アップと英文を読む抵抗感をなくすことは達成できたといえるだろう。しかし、3つ目の、何よりも、読書の楽しみを体験して、それを卒業後も継続できるような自律的な「フィットネス」英語プログラムを構築することに関しては、疑問が残った。

5. 3年目の試み(2009年度) — 「アイスブレイキング」ゲームの導入、教科書の使用、TAの活用、「エスノグラフィック」アプローチ

5.1 「アイスブレイキング」ゲームの導入

本年多読授業も3年目となり(34名)、過去2年間の問題点を解決すべく新たな取組みを行った。1つは、エネルギー溢れるクラスを保ちながら、いかに私語を抑制するかという問題だ。新たに大学生活を始めた1年生にとって、友人たちとの会話はとりわけ重要だろう。そうであるなら、そのような時間を設けてしまえばどうだろうかと考えた。クラスの良い雰囲気は、効果的な読書環境に必須であるから、まずはグループが打ち解けるように最初に

自由に会話をさせてはどうだろう。そのようなことを考えていた折りに、1年目の多読のクラスに参加し、現在3年生となった学生が、授業の最初に「アイスブレイキング」のゲームをすることを提案してくれた。彼は教職を目指しており、教育学の専門家である小峰直史先生（本学准教授）の指導の下、1年生が多読授業だけでなく、大学生生活に溶け込むことも念頭に置きながら、実践的な指導提案書を作成してくれた。ゲームを数回授業の最初に導入することとし、それぞれのゲームの目的を明確に設定し、実施後には学生からのレスポンスもとることにした。その評価によりゲームを続けるか否かの判断の指標とするためである。

第1回のゲームを4月24日に行った。クラスを2つに分け、誕生日順に輪を作らせる「仲間づくり」というゲームと、皆が手をつないで握手を送りあってその早さを競う「インパルス」というゲームを行った。前者はお互いに声を掛けなければ、コミュニケーションは始まらないことを体験させることが狙いである。ゲームで歓声を上げ「汗をかいた」後、4人のグループを作り向かい合って座らせた。グループで自己紹介をしてから、スターター・レベルの好きな本を読ませた。この読書の時間は、私語は皆無で教室中が静まりかえり、全員が集中していることが分かった。最後は再び自由会話で終わらせ、グループ毎に読んだ本について話し合いをもたせ、最も面白かった本を1冊選びクラス全体に紹介させた。クラス全体の雰囲気がかわめて良好で、学生たちが書いたコメントにもそれがよく表われていた。36名中35名が授業に対して肯定的な評価をした（28名がゲーム、授業が「楽しかった」「良かった」、7名が多読に関し「スラスラ読めて楽しかった」と評価した）。

第2回目のゲームはゴールデンウィーク明けの5月8日に、「ジャンケン」と「質問ゲーム」を行った。ゲームは、「みんながワイワイできて盛り上がるので、とても良い」と評価され、「GW明けには最適なゲームでした」と肯定的な意見が多かったものの、質問内容をより面白いものにするべきなどの意見があった。連休明けにゲームをすることには意義があったが、その場合、やや調子が落ちているので、個人のゲームではなく団体のゲームにする

方が効果的であったと反省させられた。

第3回目のゲームは、グループの席替えをした2週間後の6月5日に行った。この頃になると大学生活にも、多読にも慣れてくる時期であるが（「最近、大学生活にもなれてきました。時間割を見なくても9割ぐらいはもう覚ええました」、「毎週少しずつ多読に対する興味が上がってきていると思う」、「だんだん文章読むのに慣れつつある・・・」）、一方で「最近、みんなも私も調子がよくない」、「生活リズムが完全に狂っています」、「五月病になったような感じだ」などといった不調を訴える声が目立ち、クラス全体が疲れている印象があった。とくに、梅雨に入った5月29日に疲れがピークに達したようで、「最近疲れがたまって・・・まともに本もよめません」、「毎日筋肉痛です」、「疲労感と眠気にやられて集中できず・・・」、「最近大学やバイトがたくさんあるのでとてもつかれてしまいました」といった声が多くあがった。「低調期」を改善するための工夫として、新たなグループ作りと、最後のゲームを導入することにした。すでにクラスでは打ち解けた雰囲気ができ上がっているので（「まるでカフェのよう」、「癒しの授業」などのコメントが書かれた）、最後の仕上げのゲームとしてより深い議論を促す「結婚ゲーム」を当該学生が提案してくれた。これはグループごとに、結婚に必要なものを話し合い、優先順位をつけていくものだが、お互いを説得する技術が必要になる。授業最後のコメントには、メンバーが「みんな違う意見を持っていた」ことが分かりそれが「面白かった」、「自分の意見もちゃんと伝えることができたし、みんなの意見も聞けたので充実していました。あと1時間は話し合いたいと思いました!」、「グループディスカッションで自分の意見を積極的に言うことができて良かった。一見驚かされるような他人の意見も、根拠や理由を聞いてみると意外と納得できるものだったと思った。他人の意見を聞くという行為は、自分の思考回路にさらに磨きをかけるものだった」となど、テーマも目的も最後のゲームとしてきわめて適切であったことが分かった。

5.2 多読の中だるみ解消策 ― 教科書の使用

単純な多読の授業でさまざまな工夫をして参加者のモチベーションを高め順調に進めてきても、途中どうしても超えなくてはならない壁がある。梅雨に入って気分が滅入り、前述したような疲れの出る時期に、多読でも停滞感が現れる。「なかなか読み進められなくて、多読は難しいなど実感しました」、「速読しようとするとう内容が理解できなくなります。でもゆっくり読もうとすると日本語訳してしまいます」、「(英語の勉強が)進んでいるようで進んでいないので非常にあせっています」というように、勉強方法を教えて欲しいというコメントが多く見受けられるようになる。この問題に効果があったのが、1 つは多読に関する教科書の使用だった。学生たちには、予めクリストファー・ベルトンの『英語は多読が一番!』(ちくまプリマー新書)を購入させた。多読の仕組みは担当教員である筆者が要点を伝えることとし、授業で使う教科書としては英語の本の楽しみ方、ベルトンの言葉を使えば「英語の本に隠れている魔法」を解き明かすような本を選んだ。この本を通じて、たとえば文全体が大文字で書かれている場合は登場人物が叫んでいる、イタリック体が使われる用法の1つは、「そんなこと信じられない!」というニュアンスがあることなど、英語の豊かな表現法を物語の文脈の中で再認識させた。冒険ファンタジー、メアリー・ポーブ・オズボーン著の *Magic Tree House* シリーズなどは、簡潔な文章で臨場感溢れる物語が展開されるが、このような表記が効果的に使われ、登場人物たちの感情が実によく伝わってくる。この本は多読のレベルとしては、GR のレベル 3 位に位置し、レベル 1 を読む学生にはまだ難しいのだが、内容が面白いので、授業で紹介するとたちまちのうちに広まった。ただひたすら読ませるだけでなく、多読の仕組みを詳しく説明し、英語表現の豊かさを勉強させることも、多読を継続させるために重要であることが分かった。

5.3 TA の活用 ― 英語勉強法のピア・サポート

3 年目の多読で試みたもう 1 つのことは、大学院生の TA (teaching assistant)

に3回にわたって、彼の英語の勉強方法について話してもらう機会をつくったことである。1年目の報告で述べたように、先輩の英語勉強法の話は、教師の話とはまた違い、身近な体験談として高く評価されていた。そこで、英語教育を専門としているTAに、英語の勉強法について話してもらった。指導教官で英語教育の専門家である田邊祐司先生（本学教授）の元で学んだ効果的な英語学習法、例えば、辞書の使い方（引いた単語に付箋を付けて辞書を太らせる方法など）やポッド・キャストやインターネットを活用した英語リスニングの方法などを紹介し、努力をいかに目に見える形にするか、勉強をいかに継続するか、具体的・実践的な話をしてくれた。6月26日のコメントを見ると35名中、34名が「がぜんやる気が出た!」、「モチベーションがかなり上がりました」、「すごく役に立つものばかりでよかったです」という熱烈な反応を示した。

この時期は、ゲームのところで述べたように学生たちが1つの壁を体験し、停滞感を感じる頃だ。TAの話はこの停滞感を打破し、前進するきっかけをつくった。「今日は、英語に関して解決したいことがいくつか解決されて、少しスッキリしました」という声が聞かれた。TAの活用で良かった点は2つある。1つは、年齢が近く、TA自ら実践しつつある勉強法を、単語帳や参考書の選び方まで学生たちに具体的に示せたことである。情報が溢れるなかで、何から始めたらいいのか「焦っていた」学生を、「少し落ち着いてできるところから取り組んで行きたい」という気持ちにさせた。「テキストなど多すぎてどれを使えばいいのか困っていましたが・・・数冊紹介してくれたので、それらのテキストを買って勉強してみたいと思った」と書いた学生もいた。「あせらなくていい」というメッセージを送ったことが、この壁を越える力を与えたようだ。TA自身が大学院1年目で英語教員採用試験に合格するなど高い教育的資質をもっていることもあるが、それを差し引いても、受講生と同じ目線に立って話ができる先輩のサポートが効果的であることは間違いないだろう。

多読授業におけるピア・サポートの効果をさらに検討してみると、興味深

い事実が分かった。というのは、TA は、多読の原則と一見反するように思われるアドバイスを学生に与えたからだ。多読の精神は、英語を「勉強する」という既存の英語勉強法から 180 度の方向転換を図ることだ。しかし、TA の話は、紙媒体の辞書を使って、分からない単語は即調べて印をつけるなど、こつこつと英語力を伸ばしていくための伝統的な英語「勉強」法である。この試みで再確認されたことは、英語専攻の学生は英語の「勉強」をしたがっている、それが楽しみであり、安心感を与えるということだ。英語の漫画をととも面白く読めたが、身になっていないように思える、という意見に端的に現れているように、”No pains, no gains”の考え方からは完全に自由になれない。英語を読んで理解しただけでは満足せず、「勉強」をしないと英語が向上しないとと思っている。しかし、社会人になってからは例えば、インターネット上の英語の文章から必要な情報を得られればそれでよいのであり、ただ目的もなく英語を勉強することはなくなる。しかし、高校までの英語教育に身を置き、受験勉強をくぐり抜けてきた 1 年生には、多読の授業は、これまでにない楽しい読書体験とともに、楽しいことに身を置くことがほんとうに効果を生むのかという疑念とが、気持を大きく揺らすことにもなる。その揺れを落ち着かせるためにも、多読を成功させるには、学生たちがこれまで慣れ親しんできた環境に合わせることも重要であることが分かった。とくに、英語が好きで入学してくる英語専攻の学生にとってはなおさらである。一部の多読法では、辞書使用や他の活動の禁止を徹底しているものもあるようだが、筆者の 3 年間の経験では、一見矛盾する要素でも、学生のニーズに合わせてさまざま取り入れることが、かえって多読の効果を上げることにつながることが分かった。学生たちの士気が下がる時期に、TA に話をしてもらったことは、学生たちの士気向上に大いに役立った。

一旦壁が破られると、依然として「いろいろ疲れている」状態でも、多読にも確実に変化が現れ始める。「久しぶりに多読をしたら、以前よりスラスラ読めたような気がしました」、「単語は分からなくて不安になる部分はありますが・・・それでも内容はだいたい理解できています」、「本にも慣れ

てきて、Level 1 くらいなら割と平気に読める」などの意見が書かれるようになってきた。

ひとつ、TA の多読授業の観察で面白かったことは、TA の話に学生たちは熱烈な反応を示し、ぜひ実行したいと言うのに、実際に実行する学生はあまり多く見られず、相変わらず多読を楽しんでいるというのだ。確かに、こつこつと英語の勉強をすることが英語力を伸ばす一番の方法で、そうしたいと思っけていても、継続的に実践することはやはり難しいのだろう。その点、多読はただ楽しめばよいので、迷いを克服すれば、継続してできる効果的な勉強法なのである。

5.4 「エスノグラフィック」アプローチ — 学生による生活記録の導入

最後に、3年目の試みとして取り入れたもう1つのことは、それまで単発的に授業の最後に書かせていた授業へのコメントを毎回書いてもらうことにしたことだ。しかも、多読や授業のコメントに限定せず、大学生活やその他どのようなことでも自由に書かせることにした。人類学者のフィールドノートのような感覚で、教師が学生一人一人と会話をする代わりに、学生たちに書いてもらったものを読むことにした。これが、思わぬ効果を発揮した。いわば、エスノグラフィック調査法のごとく、学生たちのコメントを集めて集团的、時系列的に見てみると、学生たちの心の状態の推移がとてもよく分かるのだ。モチベーションの高い最初の月から、「疲れた」、「だるい」などの言葉が多くなる時期もこれではっきりとつかめる。個々の学生の反応も大切だ。多読の参考書では、授業中の学生たちの態度をよく観察して適切な指導を行えと書いてあるが、このような学生からのコメントを使えば、全体に目配りができ、コメントに教員のレスポンスを書くことによって、個々の学生に適切なアドバイスや励ましを与えることも可能になる。また、いつでも過去のコメントを時系列的に見られるので、個々の学生がどのような変化をたどってきたのか把握でき、将来の授業改善の材料にも使える。

6. 3年目の最終評価

6.1 多読総語数と図書館利用の伸び ― 教室外読書へ

3年目は「アイスブレーキング」ゲームと「エスノグラフィック」アプローチの導入，教科書の使用，TAの活用が功を奏して，2年目の問題点であった，何よりも，読書の楽しみを体験して，授業内多読から，授業外多読へと広げることに成功した。今年が多読の授業は，さまざまな活動を導入したために，実際に多読に当てた時間はかなり縮小されたが，逆に集中力は高まり，授業外が多読活動へと確実に広がった。それは図書館の多読教材利用にはつきりと現れ，昨年1年間の37名，216冊から，今年10月中旬ですでに67名，580冊へと飛躍的に増えた²。4月から12月末までの総語数を見ると，10万語以上読んだ者は17名（5割），トップは57万語で，50万語台が2名，40万語台が1名，30万語台が3名，20万語台が4名，10万語台が7名である。授業の最初にさまざまな試みを入れたために，多読に実際に費やした時間は，これまでのなかでもっとも少なかったにも関わらず，あるいは，短いことがかえってよかったのか，読書中は静まり返り，総語数も順調に伸びた。図書館利用も増え，気に入った英語のペーパーバックや日本の小説の英語訳などを購入する学生も現れ，ようやく，「フィットネス」英語プログラムが機能し始めた手応えを感じた。当該多読クラスでは，英字新聞『Asahi Weekly』誌の取材を受け，記事が9月27日号に掲載され学生たちの熱心な読書への取り組みが紹介され，これも学生たちのモチベーション向上にさらに貢献したようだ。

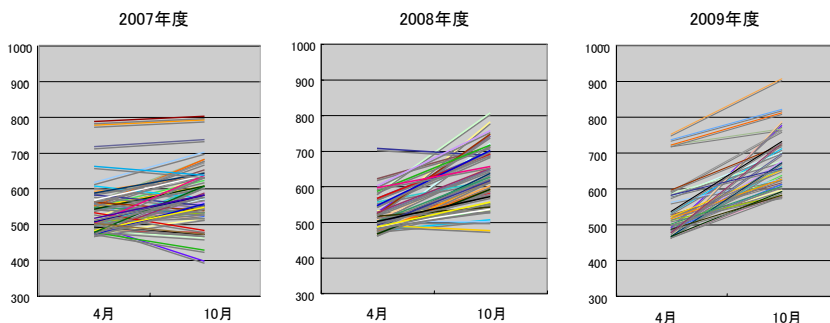
6.2 TOEIC®テスト結果

このようなきわめて好調な展開は，秋のTOEIC®テスト結果にもはっきりと現れた。TOEIC®の平均点が，昨年の99点からさらに伸びて138点もアッ

² 両数字はのべ人数・冊数である。図書館の多読コーナーに学生たちがよく来ているとの情報も入った。学生のコメントには「皆が意外に本を読んでいて，ビックリした」（6月5日），「図書館に，Level 1の本が全部借りられてて，あんまり読めないで，悲しいです」（6月5日）と書かれてあった。

プし、平均点が 674 点となったからだ。トップは、905 点で多読に熱心に取り組み 57 万語まで読破した学生で、155 点アップさせた。53 万語読んだ学生は 205 点、30 万語台を達成し、熱心に多読に取り組んだ 2 名の学生の内、1 人は 135 点上がり、もう 1 人は 320 点も伸ばしていききに 800 点近くになった。多読に熱心に取り組んだ学生の伸びは明らかである。さらに、今年の結果の特徴は、下位層の点数がいきにあがったことと、点数が下がった学生が一人もいなかったことである。もともと伸びが低かった学生でも、40 点アップさせた。クラス全体の雰囲気が良好であることがいかに学習効果を引き上げるか、3 年間の実践で強く実感した（図 2）。

図 2 多読クラス個人別 TOEIC スコア 6 ヶ月後の変化



6. おわりに

最後に、多読授業を行うことを教員に躊躇させる大きな 2 つの懸念について著者自身の意見を述べて本報告の締めくくりとしたい。1 つは、子供向け絵本や易しく書き直された多読の教材は、内容的に大学生には物足りないのではないかという懸念である。これは、著者自身多読教材 (GR に限定せず児童書も含め) を読んでみてその魅力の虜となり見事に覆された。子供向けの本は、クリストファー・ベルトンや詩人で翻訳家のアーサー・ピナードが指摘するように、英語の特徴（正確に説明できる、ユーモアに向いているなど）がよく現れ、「言語が隠しもっている秘密を教えてくれる情報の宝庫」と言

える（ベルトン，2008: 9）。ビナードが翻訳して紹介した *Brian Wildsmith's Animal Gallery* は、動物の群れを表す英語独特の表現を集めた絵本だが、日本語にはない、狩猟文化が生んだ豊かな英語表現を勉強できる³。ライオンの群れは「a pride of lions」と言うことを学んだ学生は、『ライオン・キング』にでてきた「pride」の意味を改めて理解できた。また小説を例にとれば、ジェーン・オースティンの小説など、易しく書き直された版では、確かにオースティンの小説特有の秀逸な書き出しはまったく生かされていない。しかし、話の筋だけでも読者を夢中にさせる魅力がある。原書の英語が難しくて最初の1頁でやめてしまうよりも、ともかくも全部読み終えて話の筋を頭に入れることは物語理解にとって大切なことだ。

もう1つは、教師が英語を「教えない」ことの教師側の不安がある。逆を言えば、多読は教えなくて済むので教師は楽だという考え方である。これは大きな誤解だ。別な形で「教える」ことには違いなく、また教師も「教えて」もらうこともある。ただ監督するだけではクラス全体の効果は期待できない。個々の学生に適切なアドバイスを与える「コーチ」の指導に加えて、筆者のほぼ3年の経験から、大人数のクラスをマネッジし、その都度楽しい多読イベントとして授業を立ち上げるための「プロデューサー」的役割・資質が重要であることを実感した。しかし、プロデュースが得意でない場合でも、プロデュース力のある人々の力を借りることでそれを可能にすることができる。著者も多く先生方、スタッフの方々、学生の皆さんに助けられて多読を実践することができた。

謝辞

専修大学の企画力溢れる図書館利用サービスのスタッフの皆さん、2009年度TAの大学院生小林大介さん、2008年度TAの朴成愛さん、ゲームを考案してくれた野呂拓也さん、2年目の多読授業を自発的に手伝ってくれた福岡

³ 2009年04月27日放送のNHK「視点・論点」アーサー・ビナードの「日本語の坂、英語の群れ」を参考。

賢哲さん, 多読導入時の LL 室長の三浦弘先生と LL 事務室のスタッフの皆さん, そして専門的アドバイス・ご支援をいただいた田邊祐司先生, 平田一郎先生, 片桐一彦先生, 野呂さんにご助言いただいた小峰直史先生に厚く御礼申し上げたい。多読導入にあたっては, LL 研究会でご講演いただいた日本多読学会副会長神田みなみ先生 (平成国際大学), 教材選択のアドバイスをいただいた新田晴彦先生, そして多読という効果的な英語教授法を紹介してくれた私立中学講師で友人の垂井香さんに感謝申し上げたい。

参考文献

- 酒井 邦秀・神田 みなみ. (2005). 『教室で読む英語 100 万語—多読授業のすすめ』東京:大修館書店.
- 酒井邦秀. (2002). 『快読 100 万語! ペーパーバックへの道』東京:筑摩書房.
- ベルトン, クリストファー. (2008). 『英語は多読が一番!』東京:筑摩書房.
- 吉川昭夫他. (2003). 『今日から読みます英語 100 万語!』東京:日本実業出版社.